

## 初代学院長 八束周吉先生についての調べ —資料と現地調査をもとにした「覚え書き」(2014年度)—

一貫連携教育機構学院志研究室 藤原 栄一

### はじめに

2014年学院は、創立126年を迎え、そして明年は「大学開学50周年」…で記念すべき2016年となる。

私見ではあるが、本学における「自校教育」の展開について、学院のあゆみとそのバックグラウンド、キーパーソン、成長・発展の変遷を知ることが自校についての理解の第一歩であり、それを如何にして高揚させるかが、結果として豊かな学校生活の原動力となるのではないかと考えている。

「学院志」研究員としての2014年度の活動は、名誉学院長 八束周吉先生の「告別式」の一場面を撮影した「1枚の写真」の発見がきっかけとなり、表題を主たるテーマとして取り組むこととした。

先生は松山で生誕、成長され、札幌で少年時代を過ごされたのち、愛媛県下での小学校教員〔師範〕生活(訓導・10年間)を経て、広島高等師範学校教育科へ入学された。卒業後、当時、日本統治下にあった朝鮮半島へ渡られ、20年間にわたって小中学校の(校長・視学・訓導・教諭として)教育に携わられた。そして終戦による引き揚げ、故郷である松山にて自適生活を送られていたときに、本学とのご縁があり、「大阪の人」としての生活が始まった、と認識している。

学院のこれまでの歩みは「学院の遺産」として、新たな歴史とともに次代へ継承されるべきものであることは言うまでもない。本稿は、今年度、八束周吉先生に関する調査等の活動により、明らかになったことがらについて整理する機会としたい。

(記載については、2014年1月末までの内容である)

### I. 追手門学院へ —「学院長」としての着任— ……昭和二十一年十一月三日

#### 1. 八束周吉先生については『先賢伝記集』第二巻<sup>1)</sup>に詳しく、次のように紹介されている。

…太平洋戦争が終わり、本学院最大の危機—学校廃絶の運命のなかで、昭和21年11月3日、八束周吉先生が学院長として着任された。この昭和20年、敗戦の驚天動地の出来事、連合国による占領政策のなかで外来思想が渦巻きとなって押し寄せて、教育の換骨奪胎が進み、日本の教育伝統を葬り去るという風潮にあって、八束先生は「中正道の教育」を主唱された。

これにより、戦前と戦後の精神文化の断絶の危機をくい止め、大阪偕行社附属小学校の光輝ある伝統と戦後民主主義の精神を統合し、止揚された。とくに、教育基本法の制定過程で、日本伝統の教育精神を盛り込んだ第一条「教育は人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」にある「人格の完成」という趣旨を積極的に評価し、「道」としての教育

のあり方を打ち出した功績は、今日高く評価されるところである。

## 2. 八束周吉先生と『校歌』・・・誕生をめぐるエピソード (1951 [昭和26] 年4月10日 記)

今日、追手門学院を語るとき、全学院の象徴的な存在として共有できるのが「学院歌」であり、これは65年にわたって歌われて続けている。八束先生は、創立間もない中学部自治会から発行された活動記録誌『あゆみ』創刊号(1951年3月)に、学院長として次のように記されている。

「私は校歌制定の希望を久しく抱いていたが、本学院には偕行社時代の校歌もあり、折々は歌われていたので、暫く時期を俟つことにしたのであったが、同校歌はその語句の上に尚ほ軍国調と封建制が濃厚であり、生徒諸君も漸次興味を失いつゝあり、又自治会等では速かに校歌が欲しいというような要望もあったので、ここにいよいよ制定することを決意し、昨年の春ごろから想を煉りつゝあったのである。

現在の『学院歌』の作詞は、当初「追手門学院」と記されていた。その校歌ができる以前に学院内の先生達により推敲を加えた「原作」が完成していたのである。

一、天そより立つ金城の そびゆる巖とこしえに 民主日本の象徴とあうぎ 大基礎固めんと こゝ学園に集いよる たのし学園、追手門 難波津の波に散り咲く かをり花はもゆるごと 燦爛の春たゝえんと こゝ学園に誓いよう ゆかし学園、追手門 金剛の峯、芽浮の海 こゝに拓けし河内野に 平和日本の大厚高く 創りなさんと一すぢに こゝ学園にむつびあう なつかし学園、追手門	二、 三、
--	----------

さらに、実はこの原作よりも前に、いま一つの原作があって、それを安倍能成氏<sup>2)</sup>(初代文部大臣、新憲法制定委員長 [貴族院]、学習院 初代院長に就任)にお願いして添削を請うたものの、多忙のため果たせず、次いで折口信夫氏(慶大教授-釈超空氏)に請うたが辞退して受けられず。そこで今回の原作については郷土詩人として久しく高名のある今中楓溪先生に委嘱して自由な修飾添削をお願いした。先生は非常な熱意を以て、これを快諾せられ、昭和25年十月中旬に監修を了り、私のもとへ送っていただいたのが、現在の「校歌」なのである。

○

全文の形式は五七調をとり、荘重と軽快とを折衷した文語体で、簡潔に力強い表現を用い、対句の整理に留意した。

構想については以下の通り。

《第一節》「民主主義」を謳歌し、郷土の象徴たる金城の偉容を称え、之にマッチせしめた。無限の青空のように固く高遠であるべきことを示唆した…

《第二節》「文化的国家」の建設を強調したもので、郷土に境する生駒嶺にさしいづる朝陽の如く、燦然たる文化の花が燦爛の春を讃えるが如くありたい…うら若き青年学徒の希望とし、念願とすることを歌った…

《第三節》「平和国家」の理想を高唱したもので、金城を繞る城濠に永遠の碧水を湛えている姿にこれを求

めた。

・・・この構想を一貫するものは新憲法の精神に外ならない。それは理想国家の理念である。わが愛する郷土とわが愛する母校とが、われわれの現実であって、こゝを足場にして、このような高遠な理想を健気にも、ほがらかに、つましく、学ぶのが、われら学徒の本分であり、愉悦であり、情熱であるのである。

作曲は高木和夫先生にお願いした。先生は宝塚創始の際から著名作曲家で、フランス、イタリア、オーストリアなど音楽行脚もせられ・・・(以下略)

・・・先生は「さらば大に歌わん、われらの理念を。とこえに、高らかに。」と、最後に結んでおられる。《下線については原文通り》

このように八東先生ご自身が書かれた「『校歌』の誕生まで」を改めて読み直すと、「校歌」への思いや内容についての重さを改めて感じる。

## Ⅱ. 告別式・・・「記録写真」の発見から・・・



写真① 「欣浄寺」(現、谷町1丁目) 故八東先生を偲ぶ参列者(多くは学院関係者と思われる) [撮影者不詳]

### 1. 追悼文「名誉学院長 八東周吉先生を偲ぶ」 藤田道雄先生<sup>3)</sup>

— 追手門学院 小・中・高等学校『学校報』(昭和46年11月29日)—

去る(昭和46年)10月23日、本学院名誉学院長 八東周吉先生の告別式が先生のご遺言によって、武田真功導師のもとに大手前学舎に近い欣浄寺において厳かに取り行われました。葬儀の準備万端にわたっては現職員が分担し、式には多数の旧職員もかけつけました。また戦後の一期生、二期生の古い卒業生や

父兄の顔も多く見られました。

先生には22日早暁、永眠なされ、…(略)



先生は1961(昭和36)年惜しまれながら学院長の職を退かれ、あの寺山町のアパートの4階で、奥様と二人きりの静かな余生を送っておられました。その後は学院の主要な行事にはお元気なお姿をよく見せておられました。…(略)

## 2. 『山桜会報 第17号』(昭和48年10月15日)に掲載された「訃報」

— 訃報 — 名誉学院長 八束周吉先生

昭和21年10月より35年7月まで学院長の重責を果たし、その後も名誉学院長として追手門学院の発展につくされた八束周吉先生は、…46年10月23日逝去された。

先生は広島高等師範学校を御卒業後、(日本統治時代の)朝鮮各地の学校に勤務、あるいは視学官を歴任、終戦により郷里松山に引揚げ自適中を偕行学園長として迎えられたのである。偕行学園とは大阪偕行社附属小学校が終戦により財団法人錦城育英会の経営に移管されて校名を改称したものである。錦城育英会は先生の赴任直後に連合国軍総司令部の命令で解散させられ、校名も大手前小学校と変更された。さらに財団法人大手前学園の設立により大手前学園小学校と称した。22年4月のことで、六三制の新学制が発足した時で、同時に中学部を併置することになった。続いて11月には法人名を(現在の)追手門学院に改め、25年には高等学部も開設された。

終戦直後の荒廃した世相、混迷した教育思想に棹すだけでも困難であるのに、私学としての経営組織の変転はその困難を倍加したが、先生はそこであって、偕行社小学校に一貫して流れてきた、…誠実・剛毅・自治の伝統を民主社会の人間形成の基盤におき、徒に新風潮に迎合することなく「中正堅実・質実剛健」という教育理念を打出され、…その後における追手門学院の発展をみちびき出されたのである。

…(略)…

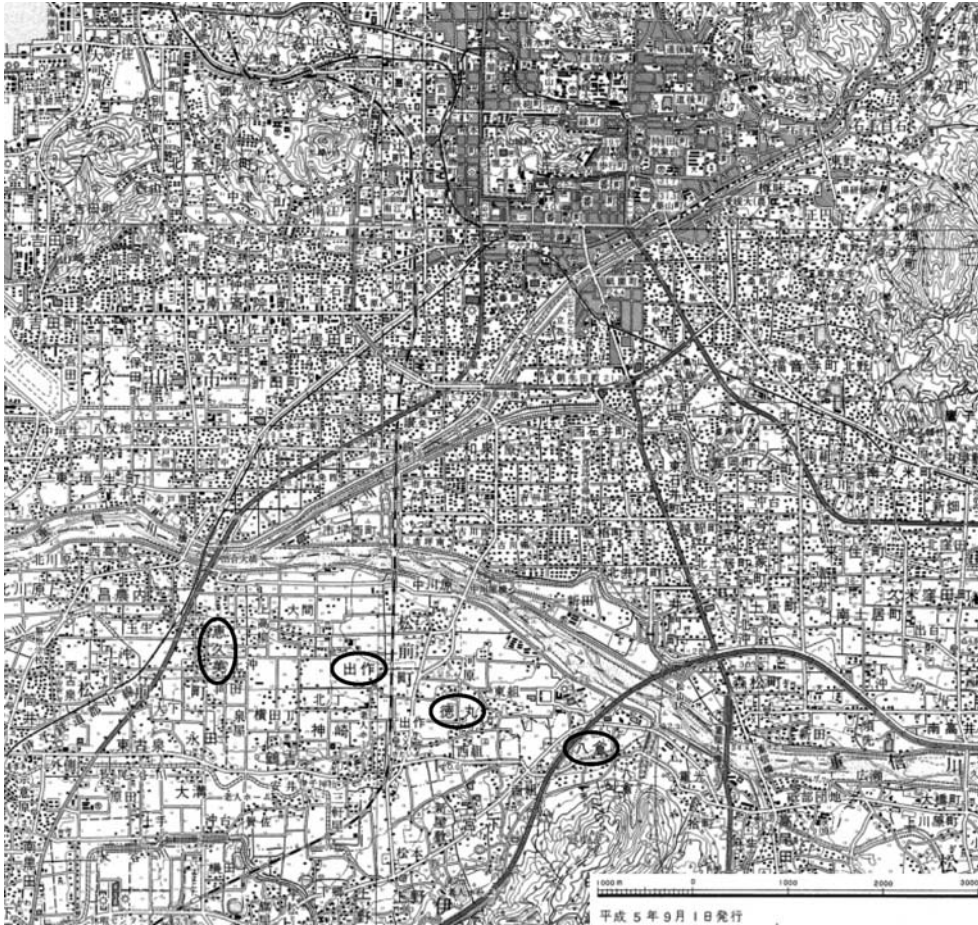
…まこと八束学院長なくして戦後の学院の復興はありえなかったといって過言でなく、先生の後半生は追手門学院にささげられた。35年7月に定年制の発足によって退職されてからは悠々自適の生活に入られ、…(略)…八十年の生涯をとじられた。

### Ⅲ. 告別式、「その後」…菩提寺・墓碑・位牌の探索調査(郷里・松山市、伊予郡松前町)

#### 1. 第1回(2014年1月)…松山市

愛媛県での最後の赴任校となった旧中島東小学校<sup>4)</sup>(現松山市・現在休校)の体育館に、八束周吉先生が作詞された「校歌」の額<sup>5)</sup>が残されている、との情報をもとに、現在では統合・新設された中島小学校を訪問して、『百年のいしぶみ』<sup>6)</sup>(昭和53年3月)から先生の当時の教育活動の一端をうかがい知ることができた。

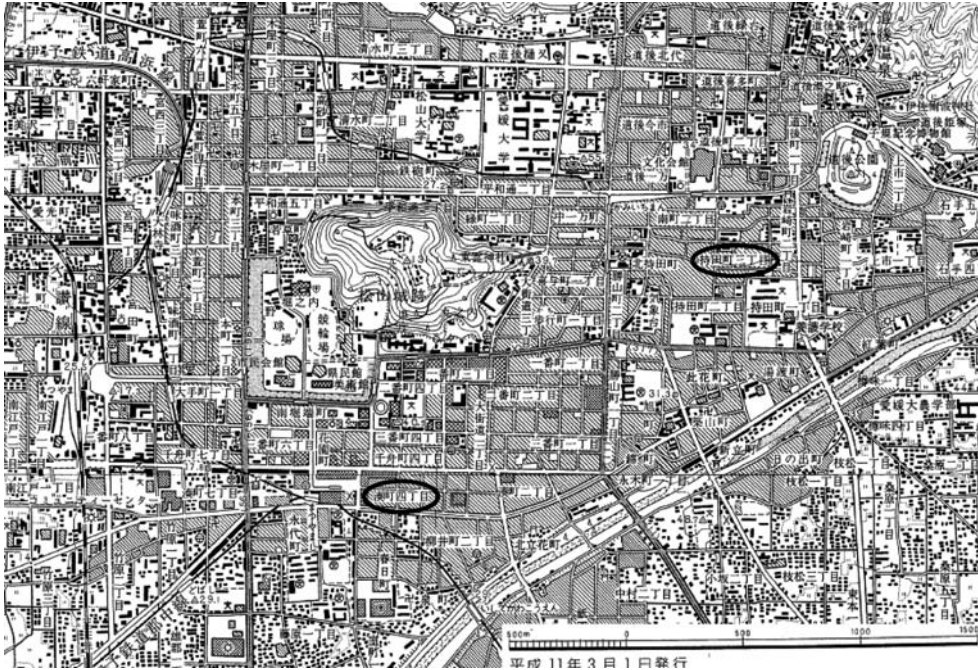




地図Ⅰ 現地調査の対象地域：調査により「八束」姓の確認がとれた集落（松前町）

生誕の地・松山市湊町四丁目は、現在では繁華な市街地となっているが、界隈には歴史のある寺院が散在している。「八束家」は北東部の持田町三丁目（周辺に松山東高や愛媛大附属小中がある文教地区）に住まいを求め、転居されたようである《「本家」での聞き取りによる》。

結果として、叔父にあたる八束喜蔵氏の菩提寺（大法寺／梅津寺墓地〔喜蔵／宝塔寺〕）で聞き取りを行った結果、視点を変えることとし、「八束家」の関係筋からではなく奥さまの旧姓（小林ナミヨ）「小林家」を軸に調査を進めることになった。



地図Ⅱ 松山市街地 —八東先生「縁の地」は、松山城跡の南、東にあたる—

## 2. 第2回(2014年6月)・・・松前町

第1回調査で聞き取りをした住職や関係機関等の協力、助言をもとに、八東周吉先生の奥さまの故郷である伊予郡松前町(松山市と伊予市に隣接)を訪ねた。当地でも各方面の協力により、奥さまの弟にあたる小林元義氏(松山南高校<sup>7)</sup>元教員)の存在と住居(借家)を確認(同町上高柳)することができた。さらに、周辺の各集落にある墓地の墓標調査から「八東家」が集住する集落の特定ができた。結果的には次の現地調査(第3回)の「予備調査」的な内容となり、期待を寄せることにつながった。

## 3. 第3回(2014年10月)

・・・「八東部会」<sup>8)</sup>による現地調査(愛媛県伊予郡松前町・伊予市八倉)

### (1) 調査の目的

八東周吉先生の墓所、もしくは位牌等の存在につながる「情報」や「手がかり」の確認

### (2) 調査の方法

#### ①八東家へのアプローチ・・・「聞き取り」調査

- ・八東家「発祥の地」と思われる伊予郡松前町徳丸地区(『松前引け』の起点とされる)
- ・八東家「先祖歴代の墓所」(あるいは位牌)の確認



- ②八東周吉先生の妻（ナミヨさん）の実家・「小林家」へのアプローチ
  - ・情報収集のため、奥さまの実弟である「小林元義」氏につながる同僚の確認
- (3) 調査の結果

①八東「本家」について・・・藩政時代、松前から松山城下への移住を、一族は『松前引け』と呼んだ。

松前町徳丸の名士である遠藤家（父は「町長」職にも就かれた）の奥さんからの聞き取りによれば、遠藤家と八東家は縁戚関係にあることが「八東家系圖」からうかがえ、八東周吉先生につながる八東家発祥の地がこの徳丸地区であることが確認できた。

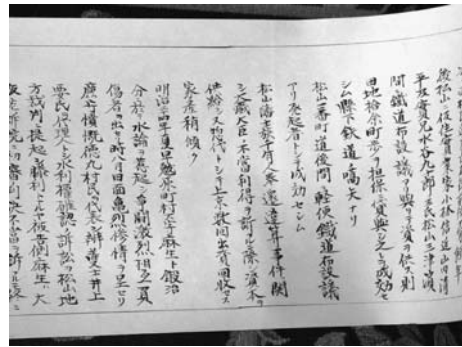
「八東家系圖」によると、当初は「八塚」と名乗っており、その後、「八東」と改姓した経緯があることの判明、また地元では「やつか」ではなく、一般的には現在も「やつづか」と読むことが確認できた。八東家先祖歴代の墓所へもご案内いただいたが、残念ながら八東先生につながることは確認できなかった。ただし、八東先生の「顔写真」を一見されたとき、「身内（祖父）にそっくり…」とご家族の反応は非常に印象的なものであった。

現在の八東家「本家」は遠藤家宅に隣接しており、現当主の八東氏夫妻からも「聞き取り」を行うことができた。

・・・徳丸地区に集中する「八東」姓の人たちの間には親戚関係はなく、明治期に姓を名乗るにあたって、もともと八東本家に仕え働いていた人たちに対して、本家から「八東」姓を与えられたという歴史的事実がわかった。このため、「本家」と血縁関係にある八東家は本家を除くと二軒で、本家を除いては無住同然の状況にあるとのことであった。本家では「繰り出し位牌」を確認させていただいたが、ここでも八東周吉先生に結びつく法名等の手がかりは見つからなかった。ご夫妻からも詳細にわたり「聞き取り」をしたものの、八東周吉先生についての情報等も現存しないことから、「八東家発祥の地」である松前町徳丸地区には八東周吉先生につながる縁戚関係の痕跡は存在しないと結論づけた。



写真② 八東家に伝わる「文書」の確認作業



写真③ 「文書」の内容



写真④ 調査・確認作業を見守る遠藤さん夫妻



写真⑤ 「八束家」先祖歴代の墓標 (徳丸集落)



写真⑥ 「繰り出し位牌」と、聞き取り先で配付した「情報依頼書」〈位牌の右〉

#### (4) 小林家について

小林ナミヨさんは伊予郡松前町で生まれ育った<sup>9)</sup>とされているが、古い電話帳や旧村地域の公民館での聞き取りでは、ナミヨさんと縁戚関係にありそうな「小林家」は見あたらなかった。

一方、事前調査により、八束先生の義弟にあたる小林元義氏(1897年生)が愛媛県立松山南高校の教員であったことが確認できていたため、松山南高校の年史『七十年のあゆみ』(1961)<sup>10)</sup>からその詳細を入手することができた。

それによれば、小林元義氏は東北帝大を卒業、同校の定時制で長らく理科の教諭として勤務されていた(昭和36年5月現在の勤務年数、37年〔非常勤講師も含む〕と表記)。昭和29年度(57歳)には、学校長に次ぐ役職である「主事」に就かれていたことも判明した。

小林家について情報収集が八束先生の「その後」を知る手がかりになると考え、教員名簿をもとに元義氏のことをご存知でかつご存命のもと同僚を探した結果、住職のK氏(1923年生)から、



近隣地域に住まれる3氏（76歳、83歳、86歳／2014年）の当時の同僚（もと教員）をご紹介いただいた。

#### 4. 現地調査における今後の見通し

K氏からご紹介いただいた元同僚からの聞き取りにより、小林元義氏を中心に小林家にかかわる（縁戚）関係者を探し出し、妻ナミヨさん（元義氏の姉や妹のトモさん）の動向までたどりつくことができれば、八東先生の墓碑や位牌、菩提寺を探る手がかりを得ることにつながるのではないかと考えている。

#### IV. おわりに

八東周吉先生の告別式（昭和46〔1971〕年）から40年余り……私の時間軸では“Expo 70”（いわゆる「大阪万博」）の翌年……というイメージをもって没後の調査に取り組んだが、情報の少なさに驚いている。現在ある可能性をもとにして考えても、時間的な制約は否めない。学院創立130年を念頭に、何とかこの40年余りの空白を解明したいものである。

八東周吉先生を知る貴重な学院史の資料となった『先賢伝記集』第二巻が発行される以前に、追手門学院小学校から『先賢伝記集』第一巻<sup>11)</sup>（1988〔昭63〕年11月）と『追手門学院の源流』<sup>12)</sup>（1997〔平9〕年12月）が発行されている。内容については、（各地を訪ねて）詳細に調査されたことがらと、収集・整理された史資料をもとにして非常に丁寧に記載されており、これらは「年史」とはまた違った意味で、“学院史の原点”とも言える資料的価値や意義には大きいものがある。

今回、私が八東周吉先生を調べる過程で、「学院史」の開拓期ともいえるべき時期において、小学校を中心とした史資料の発掘と整理に長期にわたって携わられた名村精一氏<sup>13)</sup>のご尽力によるところの成果であることを知った。

本稿では、戦後の追手門学院と八東周吉先生のかかわりについて的一端を紹介した。今後においては、少年期（札幌）・青壮年期（松山～戦前・朝鮮半島）も含め、詳細な内容を整理し、「初代学院長のあゆみ」をまとめたいと考えている。

#### 註

- 1) 追手門学院小学校「創立110周年記念事業」として、2000〔平成12〕年3月に発行された。
- 2) 初代学長 天野利武先生は、東京帝大・京城帝大時代はもとより、引き揚げられた後も懇意にされていた。
- 3) 現在の茨木中・高等学校長（当時）。退職後、福満寺（岐阜市）住職を務められた。
- 4) 1921（大10）年3月～1924年5月まで、3年2ヵ月にわたる勤務で、戦前においては最長の赴任校である。
- 5) 拙稿『「学院志」研究員としての一年（2013年度）－追手門学院の復興と発展、戦後のキーパーソンをめぐる調査・探索の「覚え書き」－追手門学院教育研究所『教育研究所紀要 第32号』（2014.3）PP.190-191

において紹介している。

- 6) 旧中島小学校 (旧温泉郡中島町立) から『百周年記念文集』として、発行 (1978.3) された。
- 7) 1949 (昭24) 年、県立男女共学校として開校 (定時制も併設)。学校の歴史は古く、1891 (明24) 年、私立愛媛県高等女学校として設立され、1901 (明34) 年には松山高等女学校として県立に移管された経緯をもつ。
- 8) 重松伸司学長 アドバイザー、谷ノ内識 学院志研究室研究員 (広報課) の共同調査メンバー。
- 9) 前掲1)、「先賢伝記集」第二巻による。
- 10) 愛媛県立図書館・松山市立中央図書館においての資料調査による。
- 11) 追手門学院小学校から「創立百周年」記念として発行された。
- 12) あとづけに「発行所追手門学院小学校・著者名村精一」と記載されている。
- 13) 小学校に残る記録によると、「百周年事業事務局」の資料調査の専従職員として、小学校の記念資料室で学院の歴史的資料の発掘と整理にあたられた (1987 [昭62] 年～1998 [平10] 年)。結果として、史資料の発掘と整理、そして各地での調査の結果、今日ある学院史の内容までまとめられ、残された功績はきわめて大きいと思われる。